

日本英文学会東北支部 第 67 回大会資料

時：2012 年 11 月 17 日（土）・18 日（日）

所：岩手県立大学滝沢キャンパス
（岩手県滝沢村滝沢字巣子 152-52）

日本英文学会東北支部事務局

（〒 980-8576 仙台市青葉区川内 27-1 東北大学文学部英文学研究室内）

TEL/FAX (022) 795-5961

tohoku@elsj.org

■大会会場（岩手県立大学滝沢キャンパス）へのアクセス

1. バス利用案内

行き：岩手県交通・岩手県北バス 盛岡駅東口発 岩手県立大学行き

→「盛岡駅前」2番乗り場より出発。「岩手県立大学」で降車*。

帰り：岩手県交通・岩手県北バス 岩手県立大学発 盛岡バスセンター・中野一丁目行き

→「岩手県立大学」より出発。「盛岡駅前」5・6番乗り場で降車。

バス料金：「盛岡駅前」～「岩手県立大学」

岩手県交通 400 円

岩手県北バス 450 円

※「岩手県立大学入口」というバス停がありますが、そこはまだ大学構内に入っていません。ご注意ください。

2. 列車利用案内

IGR いわて銀河鉄道：盛岡駅発 滝沢駅着

列車料金：「盛岡駅」～「滝沢駅」370 円

滝沢駅から岩手県立大学まで徒歩約 15 分です。

3. タクシー利用案内

盛岡駅～岩手県立大学＝ 40 分程度、3,000 円程度

■第 67 回大会懇親会のご案内

第 67 回大会懇親会を以下のように開催致します。詳細および申し込みについては、10 月に支部会員宛に別送する案内をご覧ください。

【日時】2011 年 11 月 17 日（土） 午後 6－8 時

【場所】ホテルメトロポリタン盛岡ニューウイング

目 次

プログラム	2
研究発表	4
SYMPOSIA	
i. 英文学つわものどもが夢の跡——イギリス内戦から第一次世界大戦まで	8
ii. 60年代合衆国の音楽と対抗文化——文脈と微視——	10
iii. 周辺の事例分析から考える結果構文の再評価 ——形式・意味・言語使用の観点から	11
会場案内図	13

2012 年度 日本英文学会 東北支部 大会役員一覧

支 部 長	大河内 昌			
副 支 部 長	箭川 修			
理 事	阿部 潤	石幡 直樹	岩田 美喜	
	遠藤 健一	金子 義明	後藤 史子	
	齋藤 博次	佐々木 和貴	鈴木 亨	
	鈴木 雅之	田中 一隆	村上 東	
大会準備委員	飯田 清志	奥野 浩子	川崎 和基	
	熊本 早苗	中村 太一	福士 航	
開催校委員	石橋 敬太郎			
事務局	岩田 美喜（事務局長）	福士 航（庶務係）		
	原 雅樹（庶務係補佐）			

（以上敬称略・各五十音順）

日本英文学会東北支部第 67 回大会プログラム

時：2011 年 11 月 17 日（土）・18 日（日）

所：岩手県立大学滝沢キャンパス（岩手県滝沢村滝沢字巣子 152-52）

第一日 11 月 17 日（土）

理事会 午前 11 時より（共通講義棟 303）

開会式 午後 1 時 30 分より（共通講義棟 305）

☐ 開会の辞

日本英文学会東北支部長 大河内 昌

☐ 東北英文学賞授賞式

受賞者 英文学分野 田 中 一 隆（弘前大学教授）

研究発表 第 1 発表 14：00 - 14：30 第 2 発表 14：35 - 15：05
第 3 発表 15：15 - 15：45 第 4 発表 15：50 - 16：20

第一室（共通講義棟 305）

司会 東北大学教授 石 幡 直 樹

1. Naturalist の詩人 P.B. Shelley

The Revolt of Islam を中心に

東北学院大学非常勤講師 加 藤 芳 子

2. Wordsworth's Lyrical Poetry in 1815

明治大学准教授 樋 渡 さゆり

司会 福島大学教授 川 田 潤

3. 第一次世界大戦期における J. M. Barrie の演劇

Echoes of the War (1918) の作品を中心に

秋田大学准教授 大 西 洋 一

4. 『空気を求めて』における「魚釣り」と「にょい」の意味するもの

東北大学大学院 山 口 梓

第二室（共通講義棟 306）

司会 岩手大学教授 齋 藤 博 次

1. 「聖なる放浪者」が憧れるもの

ピカレスク小説としての『ティファニーで朝食を』

東北大学大学院 藤 倉 ひとみ

2. ザ・バンドの作品とナショナリズムの問題を考える

秋田大学教授 村 上 東

	司会 福島大学准教授	霜 鳥 慶 邦
3. 世界の手触り		
D. H. Lawrence の旅行記と触覚の思想	東北学院大学講師	井 出 達 郎
4. 'Did He Think He Would Come Back?'		
『ジェイコブの部屋』とヒロイズムの明滅	東北学院大学大学院	畠 山 研
第三室 (共通講義棟 307)	司会 東北大学教授	小 川 芳 樹
1. The Double Object Construction and the Preposition in English	東北大学大学院	一ノ渡 雄貴
2. Feature-Inheritance under Full Interpretation: Its Effects on Agree	三重大学特任講師	後 藤 亘
3. 屈折接尾辞を含んだ複合語・派生語について		
2 層階層による分析から	宮城教育大学教授	西 原 哲 雄

第二日 11 月 18 日 (日)

SYMPOSIA (10 : 00 - 13 : 00)

第一部門 (共通講義棟 305)

英文学つわものどもが夢の跡—イングランド内戦から第一次世界大戦まで

司会・講師	日本大学准教授	川 崎 和 基
講師	東北文科大学短期大学部教授	今 井 裕 美
講師	宮城学院女子大学教授	鈴 木 雅 之
講師	同志社大学教授	圓 月 勝 博

第二部門 (共通講義棟 306)

60 年代合衆国の音楽と対抗文化
文脈と微視

司会・講師	秋田大学教授	村 上 東
講師	北海学園大学教授	本 城 誠 二
講師	日本女子大学准教授	馬 場 聡
講師	仙台高等専門学校教授	飯 田 清 志

第三部門 (共通講義棟 307)

周辺の事例分析から考える結果構文の再評価
形式・意味・言語使用の観点から

司会・講師	山形大学教授	鈴 木 亨
講師	岩手県立大学講師	高 橋 英 也
講師	岩手県立大学講師	Cornelia D. Lupsa

研究発表要旨

第一室 (共通講義棟 305)

司会 東北大学教授 いし 石 はた 幡 なお 直 き 樹

Naturalist の詩人 P.B. Shelley *The Revolt of Islam* を中心に

東北学院大学非常勤講師 か 加 とう 藤 よし 芳 こ 子

Percy Bysshe Shelley はロマン派の詩人とされてきたが、本論では、彼が当時の最先端の科学（博物学 natural history）を学び実践し、naturalist らしいイメージを駆使し、文学と科学を結びつけたユニークな詩人である事を、彼の作品 *The Revolt of Islam* を中心に検証していく。

Shelley はロンドン郊外の Syon House Academy では Dr. Adam Walker、Eton College では Dr. James Lind という、当代一流の naturalist 達に博物学を教授され、本人やその友人達の論文を読破し、naturalist らしいイメージを駆使して詩作していく。Shelley は、この世は悪に満ちていても、いつかは愛と平和に満ちた楽園が必ず来るという、彼なりの理想、博愛主義を詩に描く。そのために彼は、現実世界をなるべく正確に描く必要があった。それで彼は naturalist が自然界を正確に観察・報告するように、人類の圧政を暴き、そこに naturalist 的なイメージを使う。

本論では、*The Revolt of Islam* に於いて、Shelley がいかに博物学の影響を受けた naturalist らしいイメージで表現しているかを検証する。

Wordsworth's Lyrical Poetry in 1815

明治大学准教授 ひ 樋 わたし 渡 さ ゆ り

ウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) の叙情詩 “I wandered lonely as a cloud” には二版のテキストがある。[*Poems in Two Volumes* (1807), *Poems* (1815) 収録。] 景勝地アルズウォーター湖畔を歩いた際に偶然出会った水仙の群生する風景は、*Lyrical Ballads* (1802) 序文に示された詩人のマニフェストに従い、「人々によって実際に使われる言葉」を用いたシンプルな小品に見える。しかし、実はアルージュンの多いテキストである。ここでは、詩人自身による詩論と以下のテキストとの関連から作品を分析し、1815 年頃のワーズワスの叙情詩創作の原理を考察したい。(1) S.T. コールリッジ (S.T. Coleridge, 1772-1834) による批評、(2) Royal Society に提出された光学（眼球の生理学）の科学論文 (1786)、(3) 妹ドロシー (Dorothy) の日記とピクチャレスク美学関連テキスト。

司会 福島大学教授 かわ 川 た 田 じゅん 潤

第一次世界大戦期における J.M. Barrie の演劇 *Echoes of the War* (1918) の作品を中心に

秋田大学准教授 おお 大 にし 西 よう 洋 いち 一

『ピーター・パン』が代表作とされるジェイムズ・マシュー・バリー（James Matthew Barrie, 1860-1937）は、多岐に渡る主題の戯曲を著している。とりわけ第一次世界大戦期には、当時の社会状況と密接に関わる作品を書いていて、たとえば『戦争の反響（*Echoes of the War*）』（1918）と名付けられた一幕劇集に収められた作品では、書名通りに大戦が英国に、そしてバリーにもたらした影響から芝居が作り上げられている。

第一次世界大戦を扱った演劇には、実際の戦闘（たとえば、塹壕戦など）を扱う種類の作品もあるが、いわゆる「銃後」の人々の生活を描いたものが多く、バリーの芝居もそれにあたる。それらの芝居では、様々な意味での「喪失」が大きなモチーフとなっており、それが男性の出征／戦死や、亡き存在（幽霊）との邂逅（降霊術）、「失われた時代」などの形をとって舞台化されるのである。本発表では、バリーの戯曲の中でも取り上げられることが少ない「戦争劇」を紹介し、彼の伝記的事実も考慮しながら、作品中の父と息子の関係およびその「変奏」に焦点をあてて考察したい。

『空気を求めて』における「魚釣り」と「におい」の意味するもの

東北大学大学院 やまぐち 山口 あずさ 梓

ジョージ・オーウェル（George Orwell, 1903-50）の第四作目の小説『空気を求めて』（*Coming up for Air*, 1939）は、主人公ジョージ・ボウリング（George Bowling）が少年時代を過ごしたテムズ川河畔の故郷ロウワー・ビンフィールドを、魚釣りをするために、20年ぶりに再訪する物語である。この作品には、とりわけ少年時代の回想場面には、具体的で詳細な魚の名前や魚釣りに関するエピソードが満ち溢れている。この作品において、さらに特徴的なものは「におい」に関する描写である。「今も忘れられないのは魚釣りのこと……アライセイトウとラタキアたばこの芳香」などという魚釣りとおいが組み合わせられた描写が頻出する。そこで本発表では、魚釣りとおいの描写に着目し、これらが作品の中でいかなる役割を担っているのかを分析し、作者オーウェルの創作意図を探ってみたい。

第二室（共通講義棟 306）

司会 岩手大学教授 さいとうひろつぐ 齋藤博次

「聖なる放浪者」が憧れるもの ピカレスク小説としての『ティファニーで朝食を』

東北大学大学院 ふじくら 藤倉 ひとみ

ピカレスク小説（悪漢小説、picaresque novel）の主人公は社会の底辺をさまよう悪漢、ごろつきであり、しばしば旅・移動を繰り返す。その旅や移動を通して社会の実像を写實的に描くことで、鋭い社会風刺を潜ませていることが多い小説ジャンルである。トルーマン・カポーティ（Truman Capote, 1924-84）は、そのような悪漢、ごろつき、あるいは社会の底辺を徘徊する者、社会的逸脱者に一貫して強い関心を抱いていた。本発表では、『ティファニーで朝食を』（*Breakfast at Tiffany's*, 1958）を取り上げ、主人公のホリー・ゴライトリー（Holly Golightly）が、女性の悪漢・ごろつきとして造形されていることに着目し、この作品が、ギターのイメージ、鳥のイメージ、

旅への憧れなどを巧みに利用しながら、カポーティナリのピカレスク小説を構築していることを論じる。

ザ・バンドの作品とナショナリズムの問題を考える

秋田大学教授 むら かし 村上 あきら 東

合州国の音楽文化を代表するもののひとつと考えられるザ・バンドの音楽とナショナリズムの関係がはらむ問題点を考えることがこの発表の狙いである。合州国のさまざまな庶民像を提示する過程で、ナショナリズム表象の中心的領域である西部劇と重なり合う世界を描いている。また、フォークナーを文学史に取り込むことによるナショナリズムの拡大と軌を一にする問題を持った作品もある。こうした二十世紀の文化遺産に含まれるナショナリズム表象を私たち外国の人間はどのように受けとめるべきなのであろうか。日米関係に対しても強い影響力を持つ政治学者のジョーゼフ・ナイが提唱するソフト・パワー（言い換えれば文化の政治学である）の概念によれば、軍事力、経済力のハード・パワーと合わせて外国への影響力を行使するわけだが、日本に暮らしている者にとってはなおのこと避けて通れない問題性を持っている。

司会 福島大学准教授 しも とり よし くに 霜 鳥 慶 邦

世界の手触り

D. H. Lawrence の旅行記と触覚の思想

東北学院大学講師 い で たつ ろう 井 出 達 郎

本発表は、D. H. Lawrence の旅行記 *Twilight in Italy* (1916)、*Sea and Sardinia* (1921)、*Mornings in Mexico* (1927)、*Sketches of Etruscan Places* (1932) を取り上げ、とりわけ最後の作品にみられる「触覚」についての特異な思想に焦点を当て、近代の科学的認識が前提としてきた「世界をみる主体／みられる客体」という二項対立的な考えへの反発として分析する。特に、「観光 (sightseeing)」という言葉に関係する「視覚」の感覚と照らしあわせた上で、旅行記が強調する「触覚」の感覚が、主体と客体という明確な線引きを揺るがし、個々の生命が絶え間ない生成変化の流れの中にあるという、Lawrence 独自のコスモス観に結びついていることを論じたい。

‘Did He Think He Would Come Back?’

『ジェイコブの部屋』とヒロイズムの明滅

東北学院大学大学院 はたけ やま けん 畠 山 研

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) の『ジェイコブの部屋』 (*Jacob's Room*, 1922) は、世紀転換期に生まれたジェイコブ・フランダースの生涯を背景に、第一次大戦勃発までの英国社会を描く物語である。激戦地と同名のサーネーム 'Flanders' から主人公の戦死を解することが容易である一方、テキストの記述はジェイコブの出征や死亡について詳細を明かすことはない。このような状況に対して、本発表は物語の終わりで放たれる 'Did he [Jacob] think he would come back?' という言葉に注目し、そこに当時の男たちのヒロイズムに対する複雑な実態が孕まれていることを確認しつつ、『ジェイコブの部屋』と大戦の問題を再考する。

第三室 (共通講義棟 307)

司会 東北大学教授 小^お川^{がわ}芳^{よし}樹^き

The Double Object Construction and the Preposition in English

東北大学大学院 いち^{いち}の^のわたり^{わたり}雄^{ゆう}貴^き

本論は、英語の二重目的語構文には音形を持たない前置詞 *to* が存在し、二重目的語動詞 *give* は前置詞 *to* と複合主要部を形成すると主張する。さらに、複合主要部の投射の仕方により項構造が決定され、項構造に基づいて二重目的語構文と与格構文の派生が決定すると主張する。本論の主張は、Rappaport and Levin (2008, R/L) の提唱する verb-sensitive approach に基礎を置くものである。R/L は、構造ではなく動詞の意味が文全体の意味を決定すると主張する。本論は、この R/L の主張を、動詞と前置詞の関係から自然な形で構造に反映することを試みるものである。本論の提案の帰結として、第一に、Snyder (1995, 2001) による複合語形成パラミターとの整合性を示す。第二に、2項動詞としての *give* の振る舞いに説明を与えることができることを示す。第三に、動詞と前置詞の共起制限に対して説明を与えることができることを示す。

Feature-Inheritance under Full Interpretation: Its Effects on Agree

三重大学特任講師 こ^こ後^{こう}藤^{とう}亘^{のぶ}

Chomsky (2008) は C から T への素性継承メカニズムを提案し、Richards (2007) はその論理的根拠に対して斬新な提案を行った。そしてさらに Goto (2011) は Richards の提案に基づき「T から C への主要部移動が適用されない（非 V2 環境の）埋め込み節では、Chomsky の提案通り、C から T への素性継承が適用されるが、T から C への主要部移動が適用される（V2 環境の）主節においては C から T への素性継承は適用される必要はない」という理論的帰結を導き出した。本発表では、この改良された素性継承メカニズムが一致操作 (Agree) に対してどのような帰結をもたらすのか議論する。とりわけ新たな提案として、C から T への素性継承は表示に適用される完全解釈 (Full Interpretation) の経済性の原理に基づいて動機付けされると主張することで、Hiraiwa (2005) など説明されないまま残されているアイスランド語の一致現象に対して原理的な説明を与える。

屈折接尾辞を含んだ複合語・派生語について 2 層階層による分析から

宮城教育大学教授 にし^{にし}原^{はら}哲^{てつ}雄^お

本発表では、この層の数の設定に注目して、従来の 3 層または 4 層代わって、McMahon (1992)、Borowsky (1986) によるに見られるような 2 層構造を援用することを提案する。この 2 層構造に従えば、層 2 において、規則屈折接辞付加がおこなわれ、さらに複合語形成が行われると想定することによって、[arm-s merchant] に見られるような例外を適切に説明することができる。また、伊藤 (1999) では最近の複合語形成において、このように内部に複数形を持った複合語が増えていくという報告もあり、これは、通時的に本来 3 層または 4 層であった語彙部門が、現代英語においては、2 層への移行が行われている証拠を示していると考えられることから 2 層階層の妥当性を示すものである。

SYMPOSIA

第一部門 (共通講義棟 305)

英文学つわものどもが夢の跡
イングランド内戦から第一次世界大戦まで

司会・講師	日本大学准教授
講師	東北文教大学短期大学部教授
講師	宮城学院女子大学教授
講師	同志社大学教授

かわ 川	さき 崎	かず 和	のり 基
いま 今	い 井	ひろ 裕	み 美
すず 鈴	き 木	まさ 雅	し 之
えん 圓	げつ 月	かつ 勝	ひろ 博

戦争や革命には巨大な力が伴う。したがって、国家や体制派・反体制派はできるだけ自らをつわものと化し、他を圧倒しようとするが、そこには、最後に創造と破壊が待っている。一方、創造と破壊が人々に与えた力は時代により異なるが、計り知れないものがある。それは、英文学においても同様であろう。

17世紀から20世紀にわたり、英文学において戦争が、作家や詩人に与えたインパクトあるいはインスピレーションはどのようなものであったろうか。また、作家や詩人は、それらを創造や破壊を経験しながらどのように表象したのであるだろうか。

本シンポジウムでは、イングランド内戦とジョン・ミルトン、フランス革命へとレン・マライア・ウィリアムズ、ナポレオン戦争とフェリシア・ヘマンズ、そして第一次世界大戦期戦争詩人のモデルとしてのウォルト・ホイットマンをそれぞれ検討することで、そのような問いかけに答え、さらに、17世紀から20世紀英文学における戦争表象を探っていきたい。

イングランド内戦と信仰の戦い

ミルトンが夢見たもの

川崎和基

イングランド内戦期(1642-51)にチャールズ1世は断頭台の露と消え、オーリバー・クロムウェルのもと共和制イングランドが樹立するが、クロムウェルの死後ほどなくして王政復古(1660)となった。ジョン・ミルトン(1608-74)は『教会問題における世俗権力』(1659)と『自由共和国樹立の要諦』(1659)で自らが理想とした共和制が崩壊する危機を唱えるが、国王殺しのかどで投獄され、王政復古後しばらく死の恐怖にさらされた。そのような経験をした後出版された『失樂園』(1667)、『闘技士サムソン』(1671)、『復樂園』(1671)ではともに信仰の戦いが行われているが、明らかに、『復樂園』での戦いは『失樂園』や『闘技士サムソン』のものとは異質なものとなっている。本シンポジウムでは、イングランド内戦を経験したミルトンが提示する信仰の戦いとはどのようなものであったのか、また、ミルトンが夢見た共和制崩壊の後には、何が待ち受けていたのかを探っていく。

戦争・痕跡・美術の起源

フェリシア・ヘマンズとワーテルロー詩

鈴木雅之

1815年6月18日、ナポレオン指揮下のフランス軍は、ワーテルローにおいてウェリントン公

らが率いる連合軍に敗退した。イギリスでは、サー・ウォルター・スコットの『ワーテルロー戦場』(1815)、ウィリアム・ワーズワスの『謝恩オード』(1816. 1)、ロバート・サウジーの『詩人のワーテルロー巡礼』(1816. 6)そしてジョージ・ゴードン・バイロンの『貴公子ハロルドの巡礼』第3巻(1816. 11)等、ワーテルロー戦の勝利を言祝ぐあるいは疑問視する作品が相次いだ。同じく1816年9月には、フェリシア・ヘマンズ(1793-1835)による『美術品のイタリアへの返還——ひとつの詩』が出版された。本シンポジウムでは、ヘマンズ作品を上記ワーテルロー詩のひとつと位置づけ、古代美術品と戦争のモチーフを分析しそこに家庭と国家を重ね合わせるヘマンズの戦略を読み取ることで、この作品の政治的・審美的意図を探る。

フランス革命

「傍観者」と「当事者」の意識の交錯

今井裕美

18世紀は、「戦争」の時代である。新大陸での植民地獲得に絡む一連の戦争に始まり、フランス革命勃発後は対仏戦争が主となる。かの地の「革命」は他国の内乱であり、英国にとっては「戦争」ではない。しかしながら、当時の英国を席卷した革命論争が示すように、英国人は「傍観者」以上の立場でフランス革命に注目した。政体の大変革をもたらした前世紀の清教徒革命、名誉革命に由来する「既視感」のためであり、自国の歴史評価を賭した積極的関与でもある。そして、革新的な闘争が恐怖政治、独裁政治へと変貌するにつれ、「傍観者」は「当事者」へと立場を変容させた。

そこで、革命の地を体感し表現し続けた Helen Maria Williams の作品を中心に、革命表象における「傍観者」と「当事者」の交錯を分析する。また、最初期作品から通底する「戦争」に対する批判的見解にも注目し、Williams が想定する「自由」、「平和」の本質を見極める。

ホイットマンは戦争詩のホメロスか

第一次世界大戦における南北戦争の記憶

圓月勝博

「現在の戦争を描くにあたって、ホメロスのような模範はまだ見当たりませんが、それに非常に近い存在は、50年前に『軍鼓の響き』を書いたホイットマンです」という言葉をアイザック・ローゼンバーグは、エドワード・マーシュに宛てた1916年末の手紙の中に書き記した。マーシュと言えば、1910年代のイギリス詩を刷新した詩華集『ジョージ朝詩』の編纂者であるとともに、1915年に戦場で夭折した伝説的戦争詩人ルパート・ブルックの友人でもあった。不遇のユダヤ系イギリス詩人ローゼンバーグも、1918年に西部戦線で戦死することになり、T・S・エリオットによって現代最高の戦争詩人と賞賛されることになるが、フランスの戦火の中に身を置きながら、自らの戦争体験を語るにあたって、アメリカ詩の独立宣言とも呼ぶべきウォルト・ホイットマンの詩集『草の葉』を読んでいたのである。本発表の目的は、南北戦争と第一次世界大戦の戦火をくぐり抜けながら、20世紀イギリス文学の中で古典的地位を獲得することになる19世紀アメリカ詩人ホイットマンの戦争詩を精読してみることにある。

第二部門 (共通講義棟 306)

60年代合衆国の音楽と対抗文化
文脈と微視

司会・講師

秋田大学教授

講師

北海学園大学教授

講師

日本女子大学准教授

講師

仙台高等専門学校教授

むら
村
ほん
ば
飯かみ
上
じょう
城
ば
場
だ
田せい
誠
きよ
清あきら
東
じ
二
あきら
聡
し
志

村 上 東

60年代の音楽だけが対抗文化と呼ぶべき特質を備えているのだろうか。前後の時代との関連はどうだったのか。そして、そもそも60年代は対抗文化の時代だと言い切って構わないのだろうか。

合衆国文化の流れに対し根源的な批判を持ったビートは50年代にかたちを成していたし、ヒッピーに代表される大衆文化の盛りあがりも60年代後半に集中している。白人へと広がっていくことで対抗文化の欠くべからざる要素となったブルーズは、アフリカ系市民の受容をみる限り、衰退期に入っている。また、アフリカ系市民の暗い過去を殆ど連想させない未来志向の雰囲気を含んだアース・ウィンド・アンド・ファイアの最盛期は70年代へとずれ込む。

50年代から70年代へと時間の幅を広くとること、そして、現象を若干微視的に捉えることで、大雑把に対抗文化の音楽として片付けられるものへの理解を深めることができないであろうか、それがこのシンポジウムの姿勢である。なお、北海道支部と東北支部がささやかながら続けている交流事業の一環であることも付け加えておきたい。

(このシンポジウムは日本英文学会東北支部と日本アメリカ文学会東北支部との共催で企画、実施されます)

ジャズのスピリチュアリティと60年代

本 城 誠 二

アメリカ文化の融合性、文化横断性をその起源から持っているジャズは、1940年代のビーバップ〜モダン・ジャズにおいて芸術性を獲得し、公民権運動が高揚した60年代においては、マックス・ローチやアーチャー・シェップのアルバムにおけるように黒人の権利やプライドを主張し、その黒人性を強調した。一方ではコルトレーンのジャズのようにスピリチュアリティを前面に押し出したのは、黒人独特の宗教体験の歴史をふまえているとも考えられる。

しかし60年代の音楽的成果は若干のタイム・ラグをへて60年代の終わりとも言える70年代初頭に強く発現したのではないだろうか。同時代のジャズ・ロック、フュージョンの商業性を横に置くと、70年代の黒人ジャズはその黒人性の濃さ、長さを伴う内容の密度とメッセージ性と共にスピリチュアリティが際立つ。本発表では、黒人美学の一つでもあるジャズにおけるスピリチュアリティが何故70年代初頭に大きくクローズ・アップされたかについて考察する。

〈意識の拡大〉という言説とサイケデリアの音楽

馬 場 聡

シオドア・ローザックの『対抗文化の作り方』(1969年)は、当時進行中であった反体制文化

の動態をリアルタイムに論じた古典的名著として知られている。ローザックは、若年層による幻覚剤への陶醉を「第二次大戦後に対抗文化が見せた多様な姿の共通分母」と評して、「意識の政治の探求」に対抗文化の本質を見ている。

本発表では 60 年代サイケデリック文化の成立に不可欠であった〈意識の拡大〉という言説の生成過程を冷戦文化史の視座からに跡付けた上で、アメリカ西海岸を中心に一世を風靡した「サイケデリック・ロック」という、いささかとらえどころのないジャンルの特徴について論じる。さらに、このジャンルの隆盛を支えた『サンフランシスコ・オラクル』をはじめとするアンダーグラウンド・メディアとの関係についても言及する。

1960 年代米国大衆音楽 ソウル・ミュージックの読解

飯田 清志

大衆音楽は、不特定多数の人々に娯楽を提供する一方で、時代を映す鏡にもなる。純粋な娯楽が、社会性を付与されていく力学はきわめて複雑である。楽曲は作詞・作曲者の手を離れ、演奏者によって自由に改変される。さらに改変された変化形は、受け手（大衆）によってさまざまに解釈される。時に受け手の誤読が演奏者に影響を与え、音楽の質を変えたり、新たな音楽スタイルを作り出すこともある。

ソウル・ミュージックは、黒人大衆音楽の分派として誕生し、1960 年代には公民権運動等の市民運動と結んで人気を得て、米国大衆音楽の主流を形成した。今回の発表では、ソウル・ミュージックの発展史を概括しながら、オーティス・レディングが作った楽曲「リスペクト」が、アレサ・フランクリンの歌唱によって改変された例を取り上げ、大衆音楽が政治性を獲得する過程を明らかにしたい。

第三部門（共通講義棟 307）

周辺的な事例分析から考える結果構文の再評価 形式・意味・言語使用の観点から

司会・講師

山形大学教授

講師

岩手県立大学講師

講師

岩手県立大学講師

すずき とも
たかし 英也

Cornelia D. Lupsa

結果構文は、この 20 年ほどにわたり理論を問わず広く文法研究者の関心を集めてきたトピックの 1 つであり、その研究成果は、様々なかたちで文法理論の進展に寄与してきたといえる。本シンポジウムでは、統語論、意味論、語用論など多面的な視点から、これまでの研究では、「周辺の」、「例外的」、あるいは「逸脱的」として扱われてきたような事例に焦点を当て、いわゆる「中核的」な事例分析との関連で、従来の結果構文の理論的特徴づけの見直しを試みる。それぞれの発表を通じて、研究対象としての結果構文が、いまだに汲めども尽きぬ文法探求の源泉であることを示すことができれば幸いである。

日本語の「派生的／強い」結果構文について 対照的文法研究における記述的妥当性の観点から

高橋 英也

本発表では、日英語の結果構文に関する対照研究で広く認められてきた伝統に反して、日本語の当該言語現象に「本来的／弱い」対「派生的／強い」という対立的パラダイムは存在せず、「派生的／強い」結果構文が日本語においても原理的に可能であることを主張する。特に、日本語の結果句は副詞類であるという立場に立ち、日本語の結果構文の形成に対して新たな定式化を与える。また、叙述関係を利用する英語の場合とは異なる様式で、日本語の結果句は構造構築の過程で動詞と外的併合されると論じる。そして、外的併合に課されるラベリングのアルゴリズムにより、日本語における AP 型結果句と PP 型結果句の間の様々な非対称性を含み、日英語の結果構文の諸特性が自然に導出されることを示す。また、本発表では、複合語パラメータの妥当性や結果構文の慣用化、さらには移動構文の分析に対する拡張の可能性などについても考察する。

結果構文の限界に挑む

Unique Path Constraint に対する反例から考えた結果構文の意味構造

Cornelia D. Lupsa

英語の結果構文は、Goldberg (1995) で提案された Unique Path Constraint のような制約によって制限されるとされている。この制約によって、単文における位置変化や状態変化を表す結果句は一つに限られるのである。実際、従来の文献で扱われてきた結果構文の例をみると、この制約が正しいと思われ、Jonathan ran his legs off to the goal のような、結果句を二つ含む結果構文は不可能もしくは周辺のとされていた。しかし、母語話者はこのような文も可能なものとして認めているため、このような例文も説明すべき例として扱わなければならないと論じる。本発表では、Unique Path Constraint に対するこのような反例を指摘し、これらの本質がどこにあるかを明らかにしたうえで、中村 (1995, 1997) で提案された X' 意味論の枠組みにおいて、英語の結果構文の新たな説明を試みる。

結果構文における非選択目的語の意味解釈

文法の規範性と言語使用の創造性のはざま

鈴木 亨

いわゆる「強い／派生的結果構文」には、単に動詞の語彙意味には含意されない結果状態だけでなく、動詞によっては本来選択されていない「非選択目的語」が生じる事例がある。その中には、再帰代名詞や身体部位など語彙タイプが特定され、一定の生産性を持つ構文イデオムの表現もあるが、一方で、文脈情報や世界知識に対する依存度の強い単発 (one shot) の新奇な事例も少なからず存在するとされる。このような単発の事例は、「強い結果構文」的な構造を可能にする文法のしくみの存在を裏づける証拠とされてきたが、そのような構造は自由に生産的に利用されるどころか、実際にはかなり限定的な事例しか観察されないという事実を認識することは重要である。本発表では、非選択目的語を伴う結果構文が認可されるしくみを、狭義の文法から語用論まで視野を広げ、文法の規範性と言語使用の創造性／逸脱性の関係について考察する。

開催校案内図

施設配置図



